COLUMN



井の中の蛙、大海を知る

伊豆 仁 総合研究大学院大学物理化学研究科構造分子科学専攻 5年一貫制博士課程5年

いず・ひとし

名古屋大学理学部化学科を卒業後、2014年4月に総合研究大学院大学物理科学研究科 構造分子科学専攻へ入学。生命・錯体分子科学研究領域 正岡グループにて、異種金属多核錯体の酸化還元挙動の調査ならびに各種触媒反応への応用を目標に研究を行っている。

「自分の長い人生の中でも、本当に大切なのは、その中のたった一瞬なのかもしれない。」そう思えるような「一瞬」が僕の留学には詰まっていた。

そうだ、アメリカに行こう

漠然としたアメリカへの憧れがあった。留学行って、英語が話せるようになったらカッコいいかな、モテるんじゃないかな……。それがアメリカに行きたいと思った最初の理由だった。

2018年1月より3ヶ月間、僕はアメリカに留学した。行き先は、カリフォルニア工科大学(California Institute of Technology, Caltech)、Theodor Agapie 先生の研究室だ。Agapie 先生の研究室では、二酸化炭素のような小分子を効率よく変換可能な金属錯体触媒の開発を行っている。また、金属酵素のモデル錯体にも着目しており、酵素の反応メカニズム解明を目指した研究も行っている。

ロサンゼルス国際空港のゲートを抜けると、そこには見たことのない景色が広がっていた。気温は30℃、カレンダーより早くシャツの袖口をまくって、僕のアツい冬が始まった。周りには日本人は見当たらず、当たり前だが日本語はどこにも存在していなくて、海外に来たのだと実感した。

「×§&¶:∥◎☞*****➤*****」

理解のできない音の羅列が空間に飛

び交う。中学校のときから習ってきた「英語」とは違う、生のEnglish。単語は知っているはずなのに、文法もわかっているはずなのに、何も理解できない。期待に胸を膨らませていた僕は、一瞬にして不安に襲われた。3ヶ月、やっていけるのだろうか。でもきっと大丈夫、僕は日本から来た「お客様」だ。「お客様は神様」だから、きっとAgapie先生の研究室ではチヤホヤしてくれるに違いない。そんな淡い期待を抱き、研究室の門戸を叩いた僕の希望は、一瞬にして打ち砕かれた。

「君は『お客様』ではない。私の研究室の1人のメンバーとして、1人のケミストとして、ここで3ヶ月研究してもらう。」

Agapie 先生から宣告が下った。非英語話者の僕にもわかるようにゆっくりと、しかし、力強く彼は僕に語った。そこからの毎日は、怒涛のように流れていった。長くいることが正義であるような日本の研究室のスタイルとはまるで異なり、とにかく効率が重視された。限られた時間の中でいかにして最大限の成果を引き出すか。昼間は息をつく暇もなく、ひたすら手を動かして実験に勤しんだ。先生とのディスカッションはほぼ毎日行われた。頭をフル回転させて、出てきた結果を考察し、先生と議論し合った。先生から泉

のように湧き出てくるアイディアに感銘を受けながら、慣れない英語に必死に食らいつきながら、ワクワクが止まらなかった。そんな日々をひと月ほど繰り返した頃、研究室に飛び交う「×§&¶:∥◎☞☀➤★」は、少しずつ意味のあるalphabetの塊に変わっていた。

楽しくもあるが大変な毎日を支えて くれたのは、化学への情熱、友人、そ して、ハンバーガーであった。

Agapie先生の研究室には、化学が大 好きなメンバーが国境を超えて集まっ ていた。彼らの目は真剣で輝いていて、 カッコよかった。不安定化合物の合成 をしたことがない僕に、自分たちの時 間を割いてまで彼らは優しく付き合っ てくれた。それにもかかわらず、一体 いつやっているのだろうと思うくらい、 自分の研究もしっかり進めていた。憧 れのアメリカがそこにあった。きっと 彼らも最初ここにきたときは今の僕と 同じ状況だったのだろう。今の僕が感 じている辛さを知っているからこそ、 手を差し伸べてくれる。彼らのおかげ で、その先にある化学の楽しさに触れ ることができた。

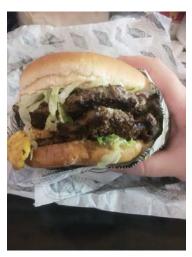
毎晩、クタクタになるまで実験した後は友人たちと食事に行った。多様な文化の国だけあって、日本食も含め、様々な国の料理を味わうことができ

た。中でも僕のお勧めは、ファットバー ガー。これぞ、アメリカ!と言わんば かりの、肉肉しいハンバーガー。成人 男性の1日分のエネルギーを優に超え ていそうなこのハンバーガーが、毎日 の原動力であったことは間違いない。

3月末、僕は再びロサンゼルス国際空 港にいた。カバンにたくさんの荷物とお 土産と思い出を詰め込んで。3ヶ月前に 飛び交っていた [× § & ¶ : || ◎ ☞ * ➤ * | は、今や僕の口からこぼれるようになっ た。この3ヶ月を思い返しながら、こ ぼれる涙を抑え、僕は日本への帰路に ついた。やっと日本に帰ることができ るという安堵よりも忘れられない体験 をおしむ気持ちで胸がいっぱいであっ た。今回の留学を通してたくさんのこ とを学ぶことができ、研究だけではな く今後の人生の糧となるのは間違いな いだろう。

3ヶ月の留学を経て戻った分子研は、 かつて僕が見ていた分子研とは違って 見えた。3ヶ月の間に分子研が変わっ てしまったのか? いや、そうではな い。僕自身が変わったのだ。心も体も、 僕はひと回り大きくなって、ここに帰っ てきたのだ。留学の貴重な体験と友人 とハンバーガーのおかげで。

最後に、今回の留学で大変お世話に なったAgapie先生及びグループメン バーの皆様、正岡先生、大学院係や総 研大基盤総括係の皆様、ADATI氏、ア メリカで出会った全ての人とハンバー ガーに深く感謝申し上げる。



FAT BURGERのXXLサイズ。これよりも大きな サイズもあったが、このサイズが一番幸せなボ リュームではないかと思う。

覧古考新15 1994年

私は長倉先生の弟子の末席を汚しているいわば不祥の弟子である。私の結婚式で、媒酌人の長倉先生そして井口先 生などのどのスピーチにも私が秀才であるというお世辞がなかったぐらいで、秀才という言葉を聞く最後のチヤンス は私の葬式という事になる。もちろん、長倉研出身者の多くも秀才で、最近分子研に移られた私の同僚岩田末広氏は、 慶応を見限って移られるという暴挙(?)からはそうは思えないが、すばらしい才能の持主であり、超秀才とでも賛 辞を呈したい。そんな優秀な人材の集団の分子研が、創立時から「研究、研究……」と全員一丸となって突っ走った 結果が現在の分子研の名声、世界の中のIMSにつながっている。考えてみると、これまでのわが国はすべてが「仕事、 仕事……」であり、それが今日の経済大国日本を生んだわけで、これと同じ研究指向に文句を言われる筋はない。

でも、やっぱりユニークな考えを持つ事、出来そうもないしかし重要なテーマに挑む事は研究を飛躍させる基本で はなかろうか。本当の話なのかどうかは知らないが、理研の仁科研究室では入所した若い研究員にゲーテのファウス トを渡し、一年程度はそれとテニスで過ごしたという伝説がある。その結果、湯川、朝永など、さらには日本医師会 をリードした武見などの逸材を生み出した訳である。あまりにも早い科学技術の進展によって、現在の我々は科学に 対する思想的対応に遅れをとっているような気がしてならない。その結果、現在の分子科学と、有機化学、生命科学、 物質工学などとの接点には、分子科学者がもっと積極的にとびこまなくてはいけない問題が多々誕生しているのでは なかろうか。仁科研と同じわけにはいかないかもしれないが、分子研の若い有能な研究者も、分子科学の最先端に目 を向けるだけでなく、今はじめれば新しい芽を生み出す本質的研究テーマを、分子科学以外の田畑から見つける事が 必要におもえるし、それが分子研が分子科学の中心であるという意義でもあるのではなかろうか。

> 分子研レターズ No.31「レターズ」(1994年) 茅 幸二 (慶應義塾大学理工学部教授)